
ドSな勇者にドFな魔王

音無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドSな勇者にドFな魔王

【コード】

N0306Q

【作者名】

音無

【あらすじ】

ドSな幼馴染、近藤楓の扱いに苦勞する今井沙良。今だけでも苦勞するのに今度はなんと異世界へ召喚！？恨まれても倒されても虐められても楓を殺してやる！！と心に決めた沙良が頑張っ生きて頑張るグダグダな物語。

ちなみにドFというのはド普通と言う意味です。

プロローグ 幼馴染は疫病神！？

「きゃあああああああああああ！！！！！！」

今日も女の子の悲鳴が学校全体に響き渡る。

事件があった訳じゃない。

これは

あたしの幼馴染、近藤楓のせいだ。

こいつはすごい。

それはもう、神の子かと思うほど。

容姿端麗、頭いい、運動神経抜群。

その容姿は、ひとたび街を歩けば芸能人にスカウトされ。

そのインテリさは、世界一難しいとされる問題を軽々と解き。

その運動神経のよさは、全ての部活からひっぱりダコ、楓がいれば必ず勝つとか言うジンクスまで有るほどだ。

おまけに性格も

いいとうれしいのだけだ。

わかった人もいるだろうけど、こいつはものっすごく性格が悪い。それを知っているのは世界中を探しても1人。

あたし、今井沙良しかいないのだ。

「はああ…」

そう考えると、ため息が出る。涙も出てきそう。

アイツはあたしの疫病神。

楓のせいで何度殺されかけたことか。

プロローグ 幼馴染は疫病神！？（後書き）

えー初投稿です。

みじかいつー！！自分でみてびっくり。

まあ、駄文ですが暖かい目で見てもらつことを祈ります…。

1話 楓が勇者!?

学校の校門から約200mほど。

あたしたちはやっと歩き始めた。

…というのは、今まで走っていたからなんだけど。
抱っこはすぐに下ろしてもらえたいし。

…まあ、明日は怖いから休むけど。

「ったくよお…何なんだよ、あいつら。まじうぜー…」

「…そつすか…」

「すぐきやあきやあ言いやがって」

「…ハア…」

「死ねよ。まじ」

「…」

ハイ。あたしが暴言はいてると思った人ー!!

でておいでー。怖いことはするけど変なことはしないよー??
こんなことしゃべってんの、1人しかいないじゃない。

か え で

「おい。沙良。聞いているか?きいてなかったら、まあ…
そつこー死刑だな」

もう嫌……。こいつ、ドSだし……。

「聞いているよー」

あたしはてきとーに返事をする。と、

『みつけた……』

どこからか声がした。

「楓……きこえた？」

「まあ……」

『あなたじゃないわ。男の人のほうよ。』

……あーそうですか。

かなりイラッときたが、まあ、ゆるしてあげよう。

『申し訳ないけど、来てもらっわね。』

これは、完璧に楓に向けられた言葉だ。

そして、楓の下が開く

と思いきや、あたしの下が開いた。

「「え。」

みごとなハモリ。

そんな事、思ってる場合じゃないけど。

「沙良!!」

楓があたしの腕をつかむ。が、楓もいっしょに吸い込まれてしまった。

「ここ、どこだよ・・・」

落ちた先は、石の神殿みたいところだった。

下には魔法陣らしきものが書かれていて、5人の人がその周りに立っている。

で、あたしの上に楓。

「どいてよ」

「え。ヤダ」

本当に何なのだろうか。こいつは。

あたしが苦勞していると、扉が開き、きれいな女の人が出てきた。

「あら？お2人もいるんですか？」

口元に手を当て、驚いた表情をする。

と、5人の中の1人が、

「いえ。何かの手違いで、近くにいた少女が巻き込まれたようです」といった。

「あら。そうなのですか」

女の方はすたすたと歩いてきて、あたしたちの前へ来た。

そして、あたしを一睨みし、

「貴方が勇者様ですね。お初お目にかかります。光の巫女、アリーです。」

楓に一礼した。

.....

「さあ、そんな変な所にいないでお立ちください。」

アリーはそう言い、スツと手を差し出す。

・・・なんだ、こいつは・・・今、変なところって言ったぞ。
あたしの上を！！

差し出された手をうけとり、楓は身体をおこす。
そして、

「ほら、沙良も。」

と、手を差し出した。

アリーは今もこちらを睨み続けている。完璧、楓にほれてるな。ア
リー。

まあ、アリーにカチンときていたので、楓の手をぎゅっとにぎり、
身体を起こしてもらった。

ふっ！どうだ！！

いやらしい笑みでアリーをしてみる。と、

「まあ。お優しいんですね。勇者様。」

「俺の事は楓でいいよ。」

・・・変わり身早っ！！

あたしスルー？

あたしは悲しい現実を見ながら話を聞く。

その話の内容は、

先月、魔王が復活したという情報が入った。

魔王を退治するために世界中の人々を呼び寄せたが、誰も勝てない。というわけで、違う世界から勇者を連れてこよう。というわけらしい。

・・・えー・・・そんな話、あんの??

「ところでその勇者、異世界からは俺が初代なのですか??」

「ええ、そうです」

うーわー!!どんまい!!楓!!

あたしは助けないからね!!

2話 魔法属性！・・・つてなに??

「魔法??」

あたしと楓の声が重なる。

「はい。楓様方の世界には無いのですか??この世界には魔法があり、人々は自身の属性を調べ、得意な属性を極めます。属性は全部で『火』、『水』、『風』、『地』、『光』、『闇』の6属性があり、属性が... そうですね。『火』だった場合、炎をつかさどる魔法が訓練すれば、100%力を使いこなすことが出来ます。しかし、火以外の属性はどれだけ極めても100%の力は出せないのです。」

アリーが、お二人は知りませんか??と言う。

「ああ。俺達の世界は魔法ではなく、科学が特化した世界なんだ。」

楓がアリーに言う。

・・・なんで、そんな事分かるんだろう。

「そうでしたか。では、続きを話します。100%は出せなくとも、魔法を学べば対属性以外は50%の力を引き出すことが出来ます。『火』と『水』、『風』と『地』、『光』と『闇』。これらはお互い対属性となります。対属性は20%しか、力を引き出せません。」

アリーは言葉を続ける。

「しかし・・・」

「しかし??」
「しかし、『光』と『闇』は別です。『光』は『闇』をつかうことは一切出来ませんが、その他なら、100%使うことが出来ます。『闇』は、『光』をつかうことは一切出来ませんが、その他なら、『光』と同じように100%引き出せます。」

ピタリ・・・

アリーは一つの扉の前で止まった。

「ここが・・・」

属性を調べる部屋になります。」

中に入ると、広間に出た。

「ここは??」

あたしは下にある魔法陣に興味津々。

「さあ、楓様。あの魔法陣の真ん中へ。」

アリーは楓をつれ、魔法陣の真ん中へ行く。

「これで、何かしらの属性・・・」

水だったら水。火だったら炎が出ているはずです。」

魔法陣の外にでたアリーは静かに目を閉じた。

「《光の精霊よ。この者の属性を調べなさい。》」

アリーがそう唱えると、

パアアアア

と、魔法陣が光った。

「こ・・・これは？？楓の周りが光ってる。まぶしっ！！」

「すすすごいです...。光の巫女である私よりも格段に多い魔力・・・
!！」

スウ・・・

数分し、光はだんだん収まってきた。

そして、楓が魔法陣から歩いてきた。

「なんだ。今の・・・」

顔には困惑の色が現れており、いかにも驚いている、という様子だ。

「っていうか、いつもあんな言葉唱えてんの？？だったら、アリー
大変じゃん」

あたしはふと、思った疑問を口にする。

「いえ。街に魔法陣がうつっているの・・・。しかし、勇者様には
私がいらべてあげたいので・・・。」

アリーはポ、と頬を紅くさせる。

「さ、楓様は光属性と言うことが分かりました。次は貴方ですよ。

沙良様。」

「え。あたしも??」

つんつんと魔法陣をつついているあたしをアリーは引き上げる。

「そうですね!!ほらっ!!」

・・・なんだか、冷たいなあ・・・
と、思いつつ、あたしは魔法陣の真ん中に立つ。

「ふう……。では、《光の精霊よ。この者の属性を調べなさい。
》」

アリーが唱えたとたん。

フツ・・・

光が消え、真つ暗になる。

「なっなに!!」

「こっこれは・・・」

「なんだ・・・!?!」

数分後、パツと光がつく。

「なんだったんだろ・・・」

あたしは二人に駆け寄る。

「・・・」

「さあな」

あれ・・・???なんか、アリーの様子がおかしい??

「アリー??」

「沙良様の属性は・・・」

闇属性です。 闇属性は・・・

魔王の属性

です・・・」

2話

魔法属性！・・・ってなに??

(後書き)

ハイ。

会話文多くなってしまいました・・・。

読んでくれて、ありがとうございます!!

3話 王サマと王妃サマ・・・は、なんか怖いです。

魔王の・・・属性・・・？

「それが何??？」

楓が言う。

「悪いことでもあるのか？」

「楓様や沙良様の前では・・・」

「いいからさ。」

「・・・」

重い口を開いて、アリーは言う。

「この、王国はっ「アリー様!!」「っ!!」

タタタ・・・

と走ってきたのは、ひらっひらのドレスを着た女の子。

・・・走りにくそうだなー

「お母様がお呼びです。勇者様を連れてこいと。わたくしはここ、ナイトレイ王国の第二王女、クレナでございます。以後、お見知りおきを。あなた方をお呼びに來ました。ささ、一緒に行きましょう。ご案内します。」

グイツと楓はクレナに手を引かれる。

「あ、まって!!」

あたしは置いていかれないように、後をついていった。

うん。一言で言えば、このお城、すごい。

周りを見渡せば、きれいな庭に噴水があったり。

調理室にはプロのシェフがお菓子を作っていたり。（美味しそうだったな・・・。）

まさに、昔のヨーロッパ！行った事無いけどね。

そんなことを考えていると、クレナは1つの大きな扉の前で止まる。

「ここが、お母様、お父様のお部屋です。」

中に入ると、大きなソファがあり、ひげの生えたおっさ・・・王様と綺麗な王妃様が座っていた。

「お父様、お母様。勇者様とアリー様を連れてきました。」

「うむ。そうか。」

王様が髭を触りながらいう。

「ありがとうございます、クレナ。勇者様。このたびは、この王国のために勝手に呼び出してしまって申し訳ありません。」

スツと王妃様は立って楓の方へ行く。

「どうか、この、ナイトレイ王国を救っていただけませんか？」

楓は、人の前ではとてもいい奴のフリをする。

「……いいでしょう。俺に任せてください。」

やっぱり。猫かぶりの天才でもあるからなあ、楓は。

「ありがとうございます。」

王妃は一度ぺこりと頭を下げたからあたしのほうを向く。

「巻き込んでしまって申し訳ありませんでした。」

「ああ、いいですよ。慣れてますし……」

「そうですね。」

王妃はあたしにもぺこりと頭を下げてから、またソファアのところに戻った。

……この王妃様、一度もにこりと笑わないよ……。王様も顔、怖いし……。

つれない人たちだなあ〜

「もうよいです。下がってください。」

王妃はそう言う。

「クレナ。勇者様方を寝室へと連れて行ってあげなさい。」

「はい。分かりました。お母様。」

あたしは一度、王様と王妃様にお辞儀をして部屋を後にした。

4話

お城は凄し!!そしてあたしはピンチ・・・??

「ここが、沙良様のお部屋となります。」
クレナが言った。

「すっご・・・」

あたしはあまりの広さにビックリした。
ここで一つ、部屋の紹介をしよう。

赤いふかふかのソファ、ふわふわのピンクのじゅうたん、もふもふのベット・・・。

広さはだいたい、20坪くらい。1人分の部屋で。

「・・・。こんなに1部屋に広さ使ってていいわけ??」

「ハイ。」

すっごいなあーと思いつつ、ソファに座る。

「それでは、ごゆっくり。」

・・・うん。王国恐るべし。どんだけ金あんの?つか、どんだけ敷地あるんだよ・・・。

ふと、あたしはアリーに言われた言葉を思い出す。

『魔王の・・・属性です。』

あの時はそれがどうした、と思っただけ・・・。

「よくよく考えたら、やばいんじゃないか・・・」

「何がやばいの??」

え???なんか、後ろから声がする。

「って、楓何でいんの!?!」

「え?居ちや悪いわけ??」

「いや、そういうわけじゃあ……って悪いだろ!」

つか、どうやって入ったんだよ……。

「べつにいいじゃん。」

楓はそう言つと、ソファに座っているあたしの横に座ってきた。

「で?なにがやばいつて??」

「いやあ、ちよつと……」

「なーにーが、やばいつて??」

キマシターー!!楓の必殺黒い笑み!!能力……人の隠していることを本人から脅して聞き出す。

「べべべ別にイ〜」

あたしは目線をそらす。

「……。」

すると、楓はすつと立ち、

あたしの頭をぐりぐりした。

「必殺 ぐりぐりクラッシュュー!!!」

「痛い痛い!……!!!言います!言いますから!……!」

「で？何がやばいと??？」

あのあと、10分間ぐりぐりされ続け、頭が尋常じゃなく痛い。
ちつくしょう・・・魔法が使えるようになったらぶっ殺してやる！！

「ええとね。魔王の属性と言う事は、あたし魔王じゃね??という
考えに・・・」
「ハッ」

・・・今こいつ、鼻で笑ったよね・・・笑ったよね!?

「バカじゃねーの？魔王はもういるんだから、お前が魔王なわけね
ーじゃん。」

・・・ごもつとも・・・。

「だからそんなことで悩むなんて」

あれ？励ましてくれてるのかな？もしかして、本当は優しい??

「ここに居るあほバカ野郎しかいないっつうの」

「あほバカ野郎で悪かったな。」

前言撤回。こいつは超うざい奴でした。

「まつ、いつか!!悩む必要なんで無いよね!!」

あたしはソファから降りる。

「ありがとう。楓。」

「別に。やっぱ、沙良は超つざいほどのポジティブ思考が似合ってるよなー！」

「ふざけんな。この腹黒野郎ー！」

・・・あ。いつちゃった・・・。

「あははははは。沙良ちゃん。今なんて??（黒笑）」

「あつははは・・・。」

どどどどどしよう・・・。

楓はあたしに笑いながら向かって来る。

「今、何ていったの??」

「ちよつ、「楓様!!どこへ行ってしまったのですか!?!」誰!?!」

パンツと扉を開けたのは、メイドさん。

「こんなところに!だめじゃないですか!探しましたよ!」

メイドさんはそう言って楓を捕まえる。そしてずりずりとひざずつて出て行った。

「ちつ・・・邪魔が入った・・・。覚えてろよー。沙良ー。」

去り際に楓が捨てて台詞を残していく。誰が覚えてるもんか!!

「・・・ぶはあ!!セーフ・・・。ナイスだ!メイドさん!」

あたしはその場に寝転ぶ。

楓はああ言ったけど・・・悪い予感がする。

あたしの勘は楓のせいによく当たるようになっていた。(よく巻き込まれたから)

「明日の夜、出てくか。」

勘がそう言ってる。

あたしは勘を信じて出て行くことに決めた。

・・・明日、楓が怖いけど。

5話

まさかの少し悲しい出来事(前書き)

ちょっと読みにくいので、間を入れてみることにしました!!
こんど、1話なども編集しようと思います。

5話 まさかの少し悲しい出来事

ピチチチチ・・・

小鳥のさえずりが聞こえる。

この世界にも小鳥っていんのかな？？

・・・モンスターみたいなのだったりして。

そんなことを考えながら起き上がる。

いいお天気だー！

「お起きになりましたか。」

メイドさんが扉を開けて入ってくる。

「お洋服は洗っておきました。その服はこのお城ですので、着替えていただけますか？」

「あ、ハイ。分かりました。」

あたしはメイドさんの言うとおりに服を着替える。

「あと、ご朝食の準備が整っておりますので、いつ持ってきてほしいでしょうか？」

「あ・・・」

朝ごはんか・・・

あんまり食べたい気分じゃないけど、絶対に豪華だよね！食べなかつたら勿体無いよね！

「じゃあ、今すぐに。」
「かしこまりました」

ウエイトレスさんみたいだな、と思いつつ、あたしは元の服に着替えた。

服は学校の帰りだったから制服だった。

しわが無いところを見ると、丁寧にアイロンまでかけてくれたようだ。（この世界にアイロンがあるのかどうかは不明だが。）

お城の中では、制服を着ている人はあたしと楓以外居なかった。

・・・まあ、当たり前といっちゃ、当たり前だけど。

「これでよし!」

あたしがきれいに畳んである洋服を誇らしげに見ていると、

コンコンッ

と扉がなり、メイドさんが朝食を持って入ってきた。

「ご朝食をお持ちしました。」

「あ、ありがとうございます。」

メイドさんはテーブルに次々とおかずをのせる。

思ったとおり、すっごい豪華だー!!

焼きたてのパン、色とりどりの野菜にトマトスープ。
魚や海老などがぎっしり入った煮物的なもの。
どれも凄く美味しそう！

「じゅっくり」

メイドさんは紅茶を入れた後、部屋を出て行った。

「美味しそう……！！」

あたしはいすに座り、スプーンとフォークを手に取った。

「いただきます！」

「……まさか、ドレッシングとかが無いとは思わなかったっ！！」

あたしは嘆く。

異世界だからって、お城だからって、ある物が一緒とは限らないと
は……

まあ、魔法がある時点で違うけどね。

朝食にはビックリした。

ドレッシングは無く、塩をかけて野菜を食べるとか、紅茶は甘くない。
トマトスープは美味しかったけど、煮物的なものは、甘さ要素
は無く、すごくしょっぱかった。

……美味しかったけど。

結論から言うと、この世界には、砂糖やいろいろな調味料を混ぜた

ものが無いことが判明した。

じゃあ、お菓子はどう作ってたんだろう……。

朝食のせいであたしの中に素朴な疑問が残ってしまいました。

……というか、メイドさん、服持って行くの忘れたかな？

6話 盗人?・・・何それ。誰のこと?

朝食を食べた後、あたしは部屋を出た。

お城を探検する為に。

いやー、やっぱり、探検だよね!

とか思いつつ、曲がり角を曲がる。と・・・。

「あれ?沙良じゃん。」

最悪です。

「かつ・・・楓っ・・・!!」

天敵来たな!!!

「ああ、あの事覚えてる??」

楓から溢れ出る怒りオーラから、あたしは逃げたくなった。

「なっ何のこと??」

「えー?覚えてない?じゃあ、俺がみっちり思い出させて」結構です!!!」「・・・ちっ」

舌打ちしやがった・・・。

とか思いながら、あたしは走って逃げる。

あのまま居たら殺されるっ・・・!!!

「こ……ここまで来たら……へ……平気だろ……」

あの後、全速力で走ってきたあたしは、見知らぬ扉の前まで来ていた。

……ついでに迷いました……。

「ここは？」

扉には『立ち入り禁止』の看板があった。

……こう書いてあると、入りたくなるのが人間だよね！

ぎい……

扉を開ける（立ち入り禁止なら鍵をかけたところよ……。）と、なかには本やら剣やらがあった。

「倉庫かな？」

あたしは積み上げてある本の近くまでいく。

「うわっ！すごいホコリ。」

本を手にとってホコリをはたいてみると、本の題名が見えた。この国に来てから、この国の言葉が不思議と分かるようになっていた。

話す言葉はなんか日本語に聞こえるし。

「『闇の魔道書』……?」

なんだろう。すっごく惹かれるっ!!

あたしはきよろきよろと辺りをみまわす。

……誰も見てないよね。

「もらってこー。」

盗み?なにそれ。オイシイノー?

ソロリ……

あたしは服に本を隠して部屋を出た。

「やっと戻れたー!!」

わーい!とあたしは部屋で喜ぶ。

あ後は大変だった。

メイドさんに道を聞いて、使用人に道を聞いて、シェフに道を聞いて……

やっと、部屋に戻ってこれた。

「これ、読んでみよ。」

あたしはぬす……貰ってきた本を読もうと本を開ける。と……

「え!？」

見知らぬ所に立っていました。

7話 変な人来ましたー！！

真つ暗な、何も無い空間にあたしは一人ぼっちになった。

「ここ、どこだろ・・・」

「わらわの眠りを妨げるのはどこの者じゃ？」

何処からか声がし、声がした方向を振り向くと、

「女・・・の子？」

女の子が立っていました。

「主は何者じゃ？」

「あ、ええと、沙良です。」

・・・って、誰か分からない人に何答えちゃってんの！？あたし！！

「そうか。沙良というのか。では、お主、何をしにここに来た？」

なんか質問攻めだなー

とか、思いつつ、あたしはきちんと質問に答える。

「えーと、なんか、魔道書とか言う奴を開いたらここに来ちゃった
だけであって、何もしに来ていません！」

すると、女の子はフウ・・・とため息をつく。

「何も知らんできたのか。それはそれで面白くないのお・・・」

え。今あたし、知らない女の子にバカにされたよね……。されたよね!？」

「まあよい。わらわの名はあんず。この本の守り主じゃ。」
「守り主??？」

あたしは、あんずが言った『守り主』に反応する。

「そう。魔道書には守り主がいて、その守り主が、入ってきた人間に、この魔道書を扱えるかどうか定めるからの。見たところ、お主は弱そうじゃが、大丈夫かのお?」

なんかバカにされたが、なんとなく守り主を殺ってはいけないような気がするのでガマンする。

「試験を受けるか?」

くっ!バカにされたままじゃあ、あたしの腹の虫が収まらない!

「受ける!」

「そうか。勇氣はあるようじゃの。しかし、この試験、死ぬ可能性があるが、とやかく言わんな?」

えっちょっと聞いてないよ!そんなの!!

「あたりまえじゃ。言っておらんからの。」

なに?今度は読心術?もうやめるよ……

「拒否権はない。さらばじゃ。楽しかったぞよ。」
「ふざけんな。この……くそ守り主イイイイイイイイ！！！！！！」
「！！！！」

あたしは最後に捨て台詞を残して、漆黒の闇に消えていった。

「面白い娘が来たことじゃの……」

あたしが居なくなつたあと、あんずが不気味に微笑んでいたのをあたしは知るよしもない。

8話 そろそろさよならだー・・・お城さん。

頭が痛い・・・

あんずに試験を受けさせられた後、膨大な知識が頭の中へと流れ込んできた。

闇の魔術というものはとても恐ろしいものだ、と、実感した。

しかし、

ある物は仕方ないよね！！あたしは、全てを受け入れる。魔王であるうと。なんであるうと、あたしの目標はただ一つ。

楓をぶつ殺す。

それだけなんだ。

「ん・・・」

あたしは目を覚ました。あたりは真っ暗で、何も見えない。

「ココは・・・あの、魔道書の中なのかな・・・？」

「そうじゃ。」

あんずの声がし、あたりをぐるりと見回す。

「よく戻ってこれたの。関心じゃ。」

こついいながら、あんずは闇の中から出てくる。

「……こんの……くそ守り神いいいいいいいいいい！！！！」

あたしはあんず目掛けて一直線に飛び蹴りをする。
と、

ひょいっ

どっせー！

よけられて落ちました。

「戦闘能力はないようじゃが、まあ、その精神だけは認めてやろう。
どっじゃ。わらわの主にならんかのおー。」

……あんずの主？

《沙良の脳内》

あんずの主！！あんずより上！！あんずに好きなだけやり返せる！！

「なる！！ぜひならせて頂きます！！！！」

はいはいっ！！と、手を上げたあたしを呆れながらも、あんずは膝
をつく。

「よろしくお願いいたします。主。わらわは一生、貴方をお守りする
ことを約束します。」

……すっごく気持ちいいー！！

あたしは、よろしくね。といい、また、眠りに落ちていった。

目が覚めたら部屋にいた。部屋は薄暗く、もう夕方近い時間帯だ。

「もう6時か……。」

あたしはそう呟きながら、電気をつけた。

『主。聞こえておりますか』

「うわっ！ー！」

突然、頭に響いたあんずの声に、あたしは驚く。

「え！？なんで！？」

『守り主と契約している場合、ずっと共鳴しているような物なので、以心伝心が可能となるのです。』

「あー……なる……って、あたしの考えていること、あんたに駄々漏れなの！？」

それはそれで嫌だー……

『まあ、それは見てみぬフリをすればいいでしょう。』

「なんか、それも嫌だよねー……。」

『それより、早く出たほうがよさそうですね。』

流されたことに軽くショックを受けつつ、あたしはあんずの注意を聞く。

『周りに5、6人の魔道士の反応が見られます。おそらく、主の闇魔法を恐れて消し去ろうと思っっている魔法使いでしょう。この速さだと、後4、5分で着くことでしょう。』

マジっすか……。あたしはあんずの注意を聞き、逃げる準備を始めた。

・・・そういえば、あたし、どうやって元の世界に戻るのかな・・・??

戻れなかったら、楓、怖いぞー・・・楓にお城を壊されないようにがんばれー！

なんて、のんきに考えてる沙良でした。

8話　そろそろとよならだー・・・お城さん。(後書き)

感想求む!!

お願いします!

ダメだしてもいいので・・・

9話 初めて使った魔法!・・・聞じゃないけどね・・・

・・・うん。一言で言うとな。

4、5分で準備しろとか、すっごい無茶だよな。

だからこうなったんだ。あたしのせいじゃない。うん。絶対そうだ。あたしのせいだったら・・・

きつと今、窓から落ちていることなんて無い筈だ。

よし。思い出してる暇は無い筈だけど、思い出してみよう。

あの後、準備してたらなんか人が来て。で、パニックたあたしが、バックを持って飛び降りたー、と。

完璧、自業自得じゃん。

あたしのせいじゃないかー!

『そんなことを考えてる場合じゃなかる・・・ないでしょう!早く闇の力を発動させて下さい!』

・・・本性出そうになってるじゃん。もう敬語なんて使わなくていいのに。

『あ、そうか?では辞めさせてもらおう。では、はよう、闇の力を発動させい!』

「あれ?そんな簡単に辞めちゃうもんなの?ってか、どうやって発動させるの!?!」

『魔道書に書いてあったろう！』風『の魔法を使っんじゃない！』
！注！ こんな会話をしても落ちていきます。

えーと、魔道書に書いてあったっけ・・・？ええと・・・
あたしは、よく思い出す。

「！思い出した！！」風の民よ。我を救いたまえ！！」

すると、あたしの身体は、風でゆっくりと降りてゆく。
凄いね！魔法！

ちなみに、これは『文章唱』（センテンス）という・・・らしい。

ふわり・・・

あたしの身体は地面に着いた。

『おお。見事なものじゃぞ。』

「ありがとうー！」

あたしはこのまま走って門の所へ行く。

途中、魔法版の赤外線レーザーっぽいのがあったけど、あんずのお
かげで難なくクリア出来た。

そして、門を通って外へ出た。

「おお、ココが街かあー！」

街は意外にイルミネーションとかが無く、明るくない。まさにドー

ナツ化現象(？)だー！

「大都市っていうもんだから、もっと活気があると思ってたのに・
・・。」

まあ、しょうがない。宿を探すかー。

あたしは、宿を探しに歩き始める。
と、路地裏に入った時

「あなた、ココの国の人ですか？」

「え、あー、そうです？」

訛りのある声だなー、この人。まあ、いいやー。一応この国の人だ
って言つとこ。と、思いながらあたしは、声がしたほうを向くと

「あなたの命、頂戴シマス!!!」

刃物を向けられました。

この国の人なら誰でもよかったのか・・・？
なんで、違いますって言わなかったんだろ・・・

やっぱ、あたしはついてないなあ・・・

9話

初めて使った魔法！・・・聞かないけどね・・・（後書き）

えー、ドーナツ化現象を知らない人は読んで下さい。知ってる人は読まなくていいですよー！

ドーナツ化現象とは、大都市の居住人口が中心部から郊外に移り、人口配置がドーナツ状になること（広辞苑より）です。

分かりにくかったら、親か、知ってる人に聞いてください。すみません。

あたしも、何が起きたか分からなかった。あたしは何も、何が起きたかも、知らないのだ。

『これは……』

あんずが、心あたりがあるように呟く。

「これは？」

『闇の魔術……。破壊か……。！』

「破壊……。？」

魔術……。？あたしは、魔法を使っていない。唱えてすらいない。唱えた覚えなどないのだ。

「あたしは唱えてないよ？」

『ふむ……。たぶん、お主が死にたくないと強く願ったことで、魔法が発動してしまったのだろう。こんなこと出来るのは……。』

「出来るのは？」

あんずは、まるであたしのした事がおかしいかのように言う。と、

「アナタ……。ま、魔道士なのですか！？」

あたし達の会話を聞いていた相手が驚いたような声を出した。

「そ、そうだけど……」

って、あたしは命狙われた人に何、言っただろ……。。

すると、相手はあたしの手をぎゅっと握り、

「すみませんでした。ぜひ、ウチに魔法をおしえてください！」
と言った。

・・・は？

「ちょ、ちょっと待って・・・。もう一回言って？」
「ウチに魔法を教えてください！」

もっかい言うけど、は？

彼女は凄くキラキラした目であたしを見る。どツ、どうしよう・・・

「じゃ、じゃあ、宿を教えてくださいたら、教えてあげても・・・。」
「ありがとうございます！ぜひ探します！」

なんか、性格が全然違うんだけど・・・。

「じゃあ、ウチが泊まった宿なんてどうですか？」

「まあ・・・いいよ。そこで。」
「やった！じゃあ、そこに案内します！」

うん。それはいいんだけどさ。

「名前、教えてくれないと、呼ぶに呼べないんだよねー。あたしは
沙良。あなたは？」

「あ。ウチはレイです！『^{みや}宮』から来ました。」
「宮・・・？」

なんたる。宮って。

「はい。宮、しらないんですか？」

「ああ……。東部の田舎から来たもんだからー。」

あははー。東部の田舎ってどこなんたるーね？ 自分で言ってる自分でツッコミする奴。

「へエー！沙良さんは『神』出身なんですネ。通りでめずらしい黒目黒髪なわけですネー！」

……。神とか宮とかって何？

ま、いいか。後であんずに聞こう。それより、

「よろしく。レイ。」

あいさつは大事だよね！

10話 危機一髪。(後書き)

1話から間を入れました！
少しでも見やすくなっているといいです。

番外編 楓の1日

「ああ〜・・・どこにいったよ。あの馬鹿は・・・」

俺は沙良を探していた。今はまだ、異世界召喚されてから、次の日の朝の9時。

スタスタと無駄に広い（どうしてこんなに馬鹿でかいんだ？あー・・・ムカツク。）城の廊下を歩く。

と、曲がり角を曲がろうとしたとき

「あ。沙良じゃん。」

ラッキー！

沙良は全身の血の気が引いたような、青い顔をしていた。

「かつ・・・楓・・・!!」

後ずさりしながら、俺を睨む沙良。

・・・けんかを売ってんのか、逃げたいのかどっちかにしろよ。後ずさりされても俺から逃げ切れないだろうけど。

でも、あえてけんかを買つといた。俺が沙良を虐めたいから。

「ああ、あの事覚えてる？」

わざと怒りオーラもつけておく。

と、ほら。うわー、面白い顔！どうしようか迷ってるよ。逃げたそうだなー！

「なっ何のこと??？」

「えー?覚えてない?じゃあ、俺がみっちり思い出させて「結構です!!!」……ちっ」

俺が舌打ちをした直後、沙良はもう逃げ出していた。

つまんねーの。もっと、慌てふためく沙良が見たかったのに……。なので、疲れるまで追いかけてやろうとしたとき……

「あ!勇者様。探しましたわ!」

クレナに捕まった。人前では俺はうらの俺を出せない。

出さないのではなくて、出せないのだ。なんせ……二重人格だから。

「どうしたの?クレナ。」

「ええ、勇者様。それが、お母様が勇者を倒しに行くメンバーを発表するので来てくれと。」

また、この子に探すのをまかせるのか。だったらあの王妃おほひみが呼びに来れば良いのに。

俺はそう思いながら、クレナについていった。

「来てくれましたか。」

王妃が俺の前へ来る。

「これからあなたと共に魔王を倒しに行くメンバーを言います。」

めんどくさっ！べつにいらねーよ。(このころの沙良……魔道書と
出会う。)

「では、まず、魔法使い兼光の巫女、アリー。」

俺がそんなことを思っているとも知らずに王妃はメンバーを発表する。言われたアリーはハイと返事をした。

「つぎに、騎士のグレン、カナン。」

「はい。宜しくお願いいたします。グレンです。」

「カナンです。宜しくお願いいたします。」

次に呼ばれたのは、グレンと言うやつと、カナンと言うやつだった。グレンと言うやつは男で、体は細く、こんな奴が剣を持てるのかと思うほどだ。

カナンと言う奴は、女だが男っぽく、気が強そうな奴だった。

「そして、最後に魔剣士兼このナイトレイ王国の第二皇女クレナ。」

「はい。よろしくお願いいたします。」

こいつ、魔剣士だったのか……。

見た目では全然分らない。

だが、この王妃が無理やりやらせようとしたんだろう。(勘)

「これで以上です。では、これからあなたにはまず、魔法を覚えていただきます。」

魔道書を選ぶので、書庫へ来てください。」

「はい。」

俺は王妃についていった。

「広い……。」

俺は書庫の大きさに驚く。(この頃の沙良……魔道書を開く)

「この中で気になる本があったら手にとって見てください。光の魔道書はあちらの欄です。」

「あちらの欄……。」

俺は指を指された先を見る。

と。

「いやいやいや。」

あの中で選べとか。超無謀に近いだろ。

「選んで本の中の守り主と契約した後、全ての本は普通に読めるようになります。2回も契約は出来ないので。まあ、あまり貴重ではない魔道書には守り主など、そもそも居ないですが。」

貴重ではない魔道書はあちらにあります。」

王妃はそういい残したあと、仕事があるからとメンバーを残して書庫を出て行った。

「楓様。魔道書の守り主と契約をしたら、その魔道書の内容は全て読めるようになります。」

そして、守り主と契約した契約者は守り主より高い存在となるので、どんな魔道書でも、契約をせずに読むことが出来ず。」

アリーがこう説明する。ふと、俺に疑問が浮かんだ。え？何？頭良
いからお前それくらい分かるだろって？無茶言っただけじゃねーよ。い
くら俺でも異世界のことはわかんねえよ……。

「命の危険はあるのか？」

「いえ。通常ですと、命の危険性はありません。ただ……」

「ただ？」

「異常ですと……命の危険性があります。」

……おい。異常のあったら俺、あぶねーじゃん。

そんな俺の考えていることが分かったのが、クレナは慌ててこう言
った。

54

「あ、大丈夫です！『異常』のは、危険物置庫においてあるので。」
「そうか。よかった。」

とりあえず、俺の身の危険は回避した。

「では、選び始めましょう。しっかりとした守り主と契約すると、
いいアドバイスなどが貰えます。」

「そんなことを言われても……。」

困るんですけど。俺、選び方が全然わかんねえよ……。

「しゃーないか……。」

番外編 楓の1日（後書き）

楓君の一日です。

完璧な楓君も勘弁した一日って……。

僕だったら、本読みのとき集中力が切れて、

たぶん寝ていると思います……。おい。

そして、そろそろ更新が安定してきたので、毎週月曜日に更新しようと思います。まあ、気まぐれで、2回一気に更新したり、月曜以外にも更新することもあると思いますが……。

11話 空想の世界・・・？

「それで？」

あたしはレイの話に夢中になっていた。

「それで、あいつらはいったんです。「教えてほしければ、この国の奴を一人殺ってこい」と。」

「ええ！なんでー？」

レイの話はこうだった。

最近、レイは魔術が習いたくて、この大陸に来た。もともと、宮や神は、この大陸と海で別れている。しかも、宮や神は魔法の発達は遅れており、まだ、魔法属性を調べる方法は無いのだという。そして、この大陸の一番東、ナイトレイ王国へ来た時、悲劇は起こった。

なんと、人身販売の人に捕まってしまったのだ。

レイはなんとかして逃げようと、レイはそいつらに来たわけを話し、そして、こうもちかけた。

「魔法を教えて逃がしてくれる代わりに、何でも言うことを聞く。」と。。。。

そして、さっきの話にいたるのである。

「殺る理由は分かりません。なので、殺さないでいるつもりでした。」

いやいや。バリ殺そうとしてたって。

「しかし、ウチはお恥ずかしいことに、武器を持つと性格が変わらしいんです。」

「なんて、たちの悪い……。」

あたしは、率直な感想を述べた。

「そうなんです。もう、あんな奴のところには戻りたくありません……。」
どうか、いっしょに旅をさせてください……!!」

レイは深々と頭を下げる。あたしはそんなレイをみて、困ってしまった。

本当に、そんなことがあるのか。とても、大変だったんだな

これが、この話を聞いたあたしの感想だった。

「いいよ」

あたしはレイにむかってそういつ。

「ホントですカ・・・!?!」

レイは信じられない!という顔をしてあたしを見る。

「え。なに?あたしがそんな悪人に見えるところでも?どうみても、優しいお姉さんでしょーが。」

「自分で言うせりふではないですネ。どうみても、超怖いお姉さんデス。」

・・・あたしは、少しショックになったが、本当なので、反論が来ない。

あたしはなんせ、猫目でかなり目つきが悪いから。

いつも、怖い怖いと言われてきた。横目で見ただけで小さい子に泣かれたり、勝手にヤンキー説を作られたり。

おまけに好きな子からは怖すぎと言っ理由で、振られたこともある。うん。あん時は泣いたね。

「まあ、そんなことはどうでもよくって。」

「どうでもよくない!」

いやいや。あたしにとってはちよー大切なのよ。大問題なの!

「ホントにいいんですカ!?!」

レイはおんなじ言葉を繰り返す。

「もしかしたら、殺しちゃうかも知れませんかヨ!?!」

「え。それ、超困るんだけど。死にたくないよ!?!」

『そんなことも無いぞよ。お主も必需品を買う必要があるじゃろつ。これから旅をするために必要な道具を集めておくのもいいと思うが
の……』

……まあ、そうだね。

つてか、あたし旅することになってるし……。

まっ、いつか！

11話 空想の世界・・・？（後書き）

えー。音無です。

っていうか、人身販売って、日本であるんですかね？？
疑問に思っている作者でした。

12話 お買い物〜!

「わー! すっごーい・・・!」

あたしは驚く。こんなに広いものなのか。市場って・・・。

あっちではスーパーしか言った事ないから・・・。

「ほんとに凄いですネエ! この市場はこんなに広いんですカ〜!」

レイがきよろきよろとあたりを見回しながら言う。

「宮ではこんなに広くないの?」

「ええ、もつと範囲が狭いですネ。といっても、小さいわけでは無いんですけど・・・。」

レイはあははと笑いながら言う。

まあ、宮の市場が小さいわけじゃ無いだろう。ここが大きすぎるのだ。

道にはズラツとお店が並んでおり、売っている物もさまざま。

まるで、お祭り騒ぎだ。人もいっぱい居る。

そんなのが、1?ほど続いている。

・・・歩くのが大変そうだなー。

「さあ、行きましょウー!」

「えー・・・。行くのお〜?」

あたしは面倒くさがりながらもレイに引きずられて市場に入っ
てい

「どこに有るんでしょうか……。」

レイは不思議そうに首をかしげる。
一時間も歩いたのに見つからない。

「……一時間も、だよ!? なのに見つからないってどうい
うことだ
ろうねー!?!」

「もうやだ……。お腹すいたー」

あたしが弱音を吐くとレイは、

「だらしないですヨ!」

と言ってあたしをずるずると引きずっていく。

「あ! ねえ、レイ。」

「なんですカ!? あそこで食べようとか言わないですよネ??」

ぐっ

あたしは言葉に詰まる。

レイが言った事は、あたしが言おうとしたことと全く一緒だったか
らだ。

エスパーか!!

・・・というか、レイから言ったんだよね？お願いしますって。あたしの方が立場、上だよね!?ね!?

「。。。。。」

あたしが無言でいると、レイははあ、とため息をついて

「しょうがないですね。行きましよう。」

と言った。

「やったー!!」

あたしは素直に喜ぶ。

ホントにお腹ペコペコだったんだよー!

わーいと喜んでいるあたしをみて、レイはハハツと笑った。

「さあ、レッツゴー!!」

あたしはお店に入ってしまった。

・・・あ、お金どうしよ。。。。。

「んまいー!!」

あたしはご飯に勢いよく食いつく。

「すごい食欲ねえ・・・」

あたしの食いつきっぷりにお店のおねーさんは呆れたような声を出す。

「あはは。本当ですよネー！」

「だって、お腹すいてたし」

レイはもうすっかりお店のおねーさんと打ち解けていた。
なんか凄い。

「ははっ！いっぱい食べてよ。そっちの方が、あたしんとも儲けるしさ」

それが狙いか、おネエさんよ・・・。

「あ、そうそう。おねーさん。ここら辺で魔法属性調べる道具、売ってるって聞いてある？」

あたしは思い出したように尋ねる。

「魔法属性を調べる道具・・・？ああ、魔法陣のことか。それなら、ここには売ってないねえ・・・。専門店に行かないと。」

ああ、どうりで売ってないはずだ。

「その、専門店ってどこに有るの？」

「この町のはずれにある、魔法専門店、『ドリーム』に売ってるよ。ちなみに、高いからね？」

……。どうしましょう。お金が無いんです。

なんて言えない……。！けど、言わなきゃ……

「あの、あのっ」

「なんだい？」

「時給……。何円ですか？」

何聞いてんだよ、あたしはっ……。！！

「ああ、あんた、お金無いんだね。」

おねーさんはふふつと笑い言った。

「時給1500ギン。どうだい？いい仕事でしょ。けっこうこの店
人気だから。」

「1500ギンか。なんか、高そうだからやる！！やらせていた
だきます！」

後でしつたのだが、お金は日本円と別に変わらないらしい。

1500ギンは1500円。

ちよーラッキーだ！

あたしはこうして、これからバイトをすることになりました。

13話 バイトせーかつー！！

「じゃ、これくらいでここの説明はやめて、早速働いてもらおうよ」

おねーさんはあだし達に言う。

今日から一ヶ月、バイトをすることになった。

その間、おねーさんの家へ居候をさせてもらう。

一石二鳥、金儲けとただで居候。こんな良い事は無い！！

と、引き受けたのですが・・・

予想外な事が。

「ちょ、きついですっ・・・！休ませてくださいっ！」

この仕事、凄くきつい！！

注文があれば聞きにいった後、厨房へ伝えに行き、料理が出来たらそれを運び、食べ終わったお皿を片付ける。

一見普通のレストランのウエイトレスだけど、これを一人ですつとやるのだ。

体力的にも精神的にもかなりきつい。

「まったく。だらしのないなあ、君。私の所は普通アルバイト雇わないうようにしてるけど、仕方なく雇ってあげたんだよ？しかも、1500ギルで。出血大サービス。分かる？だから、もうちょっと働いてくれないと。」

おねーさんはそう言いながら、てきぱきと手を動かして料理を作っている。

・・・うん。あれだ。おねーさんはかなりのDSに違いない。うん。絶対そうだ。あたしの勘がいつてるもん!!
それに、なんでレイは居ないの!?

何が、

「シヨッピングに行ってくださいス!」

だ!

少しは働けよ!!

・・・コホン。取り乱してしまった。

あたしはまた集中して、ウエイトレスの仕事に戻った。

「あのー、注文、いいですかー?」

「あ、はい!!」

「お、終わった・・・」

あたしはどさりとソファーにもたれかかる。

「疲れたー・・・」

全国のウエイトレスさんの気持ちが分かったような気がする。

ああ、アルバイトをなめていました・・・。

ごめんなさい。全国のアルバイトさん・・・。

「おつかれー!よく働いてくれたねー!助かったよ!次もよろしく

ね！」

あたしがしみじみとあっちの世界を思い浮かべていると、おねーさんが仕事からあがってきた。

「あ、はい……。って、明日もやるんだ……。この仕事……」

「あはは！まあ、がんばって！ていうかさ、君、名前なんていうの？」

あたしは、おねーさんからのいきなりの問いかけに一瞬驚く。そして、意味が分かると

「あ、沙良です。」

と答えた。

「へー。沙良って言うの。あたしはカナ。呼び捨てでいいよー！これから一ヶ月、よろしくね！」

スツ

カナはあたしの前に手を差し出す。

「ほら、握手！」

「えっ！あ、はい！」

あたしは差し出された手を受け取る。

「ふふ、じゃあ、唯一の店員を教えたいと思います！できてー」

ちよいちよいと手招きをされて出てきたのは青年だった。

楓に負けなくらいのかっこよさだ！

「よろしくお願いします。ルーズです。」

ぺこり、とルーズは礼儀正しくお辞儀をする。

「沙良です。よろしくお願いします。」

それに対し、あたしもお辞儀をする。

「じゃ、ゆっくり休んで。好きに使っていいから。この部屋。」

あたしとルーズのあいさつが終わった後、カナとルーズはそう言っ
て出て行った。

楽しい一ヶ月になりそうだなー！

あたしはそう思いながら、ベットに寝転がる。

ああ、眠い……。

眠気に襲われたあたしは、そのまま眠りについた。

13話 バイトせーかつー！（後書き）

月曜日に更新できなくてすみませんっ！

ちよっと忙しくて・・・。

本当に申し訳ございませんでしたー！！

14話 バイトせーかつもそろそろ終盤……。

バイトを始めて2週間。

そろそろバイトにも慣れ、頑張っている今日この頃……。

「おーい！ちよつと来てー！」

「あ、はい！」

カナに呼ばれ、あたしは厨房に行く。

「あのさ、この料理、8番テーブルに運んでくれないかな」

料理を渡され、あたしは両手に持つ。

そして、そのまま8番テーブルに向かった。

の、だが

「沙良……？」

思わぬ再開。

「沙良……だよな？」

なっ、なんで、楓がここにー！？

すると、隣に居たアリーが、

「沙良様がいると？ありえませんが、そんなの。」
といった。

「何でだ？」

「ここはバイトを取らないことで有名ですし、身内でも親戚でもない沙良様がここで働けるはずがありません。きっと、沙良様に似た、この店長様の身内でしょう。」

楓が疑問を口にし、それに淡々と答えるアリー。

それに対し、戸惑いながら、ばれては大変なことになるので、

「え、ええ。この店長が母の妹でして……。」

と、適当に嘘をつく。

「ふーん……。」

楓は暫くあたしをジッと見ていたが、アリーの

「早く戻りませんと、抜け出したことがばれてしまいますよ。」

という言葉で料理を食べ始めた。

「では、しゅっくり」

あたしは、逃げるように8番テーブルからはなれ、厨房へ入った。

厨房へ入った後、はぁー、と、ため息をつく。

「あ、危なかった……。」「

まさか、こんなトコまでできるとは思いもしなかったな……。
というか、抜け出してきてたのかよ……。！

内心、突っ込みを入れつつ、二人が出て行った後にまた仕事を再開させた。(それまではレイにさせてた。)

「おっつかれー！今日もよく働いてくれたね！」

カナがあたしの肩をたたく。

「いえ、それほどでも」

あたしがそう答えると、カナはあのさー、と話し始める。

「あの、イケメン客と知り合い??」

「イケメン客……?」

イケメン客って誰だろ?イケメン客……。

もしかして!!

「楓のことですか?」

「楓?楓って言うの?あいつ。」「

カナは？マークを頭に浮かべる。

「あの8番テーブルに居た奴でしょう？」

「うん。そうそう。」

「まあ、知り合っつて言うか……。ていうか、何ですか？」

「ん？いや、知り合いなのかなっと思っつてさ。」

ありがとうツ、とカナはいい、部屋を出て行く。

「どうしたのかな？カナ……」

聞いてきたことに疑問を抱きつつ、そんなに気にもならなかったため、あたしは布団に潜った。

明日もがんばろー！！

14話 バイトセーかつもそろそろ終盤・・・。(後書き)

更新を停滞してしまい、申し訳ございませんでした！

これからもこつこつとすることがあるかも知れませんが、ご了承ください・・・。

15話 バイト、終わり!! (前書き)

少し、シリアス入ります!

15話 バイト、終わり!!

バイトを始めてからちょうど一ヶ月。
バイト生活もいよいよ最終日だ。

「こっち来てー!」

「はい!」

バイトにもすっかり慣れ、お客さんとも仲良くなれたので、離れるのがさびしい今日この頃……。

あたしはいつもの様に働いていた。

そして、夜

「えー、急ですがお別れパーティを開こうと思います!」

カナが急に、ホントに急に言い出す。

「え?」

「だーから、お別れパーティを開くのよ!」

あたしが訳が分からないといった顔で聞き返すと、カナはもっつ!と言いながらも一回繰り返す。

ちょ、今からですか?カナさん……。

「と、言っても、もう11時だし……」

「さ、今日は飲むぞー!」

「聞いてよ！つか、未成年だから！！」

必死に止めようとするあたしを無視し、カナはルーズと「かんぱーい！」なんて言っている。

人の話、聞けよ！あー、もう、明日、悲しくなっちゃうでしょうが！

レイも呆れていたものの、あきらめたのか「私モー！」と言い、二人の所へ入ってゆく。

「なっ、え、レイも！？ったく……。しょうがないなあ」

あたしは苦笑しながら、

「あたしも入れてよ！」

と、みんなの所へ入っていった。

「……ん……？」

パチリ、と目が覚める。

いつの間にか寝ていたようで、カーテンの隙間から光がさしこみ、鳥のさえずりが聞こえる。

あたしは、身体を起き上がり、着替えた後、厨房へ足を運んだ。

「あ、起きた！おはよう」

「ほら、早く！」
「え、あ、うん」

あたしは言われるがままに着替えに行った。

「よし、これでオーケー」

あたしは制服に着替える。

一ヶ月ぶりの制服は、なんだかとても変な感じがした。

「・・・もう、バイトも終わり、か・・・」

正直、バイトをやめたくなかった。

カナにルーズ。二人はあたしを、本物の家族のように接してくれた。

それが、とても暖かくて・・・。

「やだな・・・。出て行きたくない・・・」

カナは、あたしが出て行くのを望んでいるのだろうか。

もし、ここにいてもいいか、といった時、カナやルーズに迷惑が
かってしまうのではないか。

しかし、レイとの約束も破れない。

さまざまな不安が、頭の中を行き来する。

「・・・あゝ！！何甘えてんの、あたしは！！楓を殺すって、心に

決めたんだろ！なのに・・・」

ぱんっ！

あたしは自分の頬をたたく。

頬がひりひりと痛む中、あたしは、より強く心に決めた。

カナに甘えては駄目だ。

自分で、自分を鍛えなければ・・・！！

15話 バイト、終わり!! (後書き)

・・・いろいろ矛盾してるかもです。
してたら軽くスルーの方向で・・・。

16話

出発!

「今までありがとう!またこっちに来たら寄るからね!」

あたしはカナたちに手を振った。

「ありがとうございました!」

レイも手を振る。

これから行くのは魔法専門店、『ドリーム』。
そこで魔方陣を買いに行くのだ。

「じゃあ、いってらっしゃい。また帰って来るんだよ」

カナはそういって、あたし達に手を振りかえした。

「いってきます!」

あたし達は歩き始める。

ドリームまではすごく距離があるらしい。この国の最南端、そこにある、『魔術市場』に行かなければならない。正直言ってすーすーっごく面倒くさいけど、レイとの約束の為だ、仕方無い……。

『……本当はすこし楽しみのお……』
「うるさいな、あんず!」

人の揚げ足取らないの!!

「早く行きましようヨ、沙良さん!」

レイがあたしの手を引っ張る。

「あ、うん!」

あたしはレイに引かれていきながら、歩き出した。

*** (ここからカナ目線になります)

「ふう……」

沙良が見えなくなった後、私は手を下げる。

「……本当に、よかったですか? あんなにお金をあげてしまつて。」

隣に居たルーズが、さっきまで沙良のいた方向を見ながら行った。

「王妃様から貰ったものなんでしょう?」

「……あの人から貰ったものなんて、いらぬもの」

あんな、ひどい人から貰った金なんて、いらぬ。

子供を大切にしない、極悪非道の……。

「あなたはナイトレイ王国、第一女なんですよ。」

「うるさいわ。執事はなにも口出さないで」

「執事だからこそ、でしょう。あんな大金をすべてあの子に渡すな

んて……。

なにかお考えでもあるんですか？」

何も考えずに渡したわけじゃない。

「……国民の税金を使うなんていやだもの。でも、返すわけには
いかないわ。だったら、お金に困ってない私を使うより、お金に困
っている人に使ってもらったほうがいいじゃない。
ルーズもそう思うでしょう？」

ルーズは黙った。

暫くの沈黙が続く。

そして、ルーズが口を開いた。

「……そうですね。お嬢様の言うとおりです。まあ、私が何を言
つても、もうあげてしまった物ですし、いまさら悔やんでも仕方な
いですしね。」

私達は、店に戻った。

16話

出発！（後書き）

遅くなってしまうってすみません。

これからはちゃんとやりますので！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0306q/>

ドSな勇者にドFな魔王

2011年9月18日03時03分発行